

認知症になっても安心して暮らせる社会を

月刊 POLE-POLE (スワヒリ語)

ぼ～れぼ～れ

ゆっくり やさしく おだやかに

理念

認知症の人と家族の会

認知症になったとしても、介護する側になったとしても、人としての尊厳が守られ日々の暮らしが安穩に続けられなければならない。認知症の人と家族の会は、ともに励ましあい助け合って、人として実りある人生を送るとともに、認知症になっても安心して暮らせる社会の実現を希求する。

「ぼ～れぼ～れ群馬県支部版」

わたぼうし

No.503

巻頭言

支部会報「わたぼうし」500号を数える

群馬県支部の会報「わたぼうし」は1982年9月19日に第1号が発行されました。

群馬県で「家族の会」設立を発起したのは、故加藤道子さん。加藤さんは1921年東京生まれ群馬県の知人とのご縁で居を移し、老人福祉や幼児教育に携わっていた方です。

いち早く認知症の課題に着目し、「京都の先生方に1年間指導を仰ぎ」、会の発足を実現してくれました。それだけでなく、1983年に民間デイ「みさと保養所」を設立する際にも、地元信頼を得る上で絶大な力を発揮してくれました。会の設立も民間デイも加藤さんの存在なしに実を結ぶことはなかったと思います。

会が動き出し、みさと保養所も軌道に乗り始めた1987年、会報は50号を数えるに至りました。この50号で、加藤さんは「よき時をえて」と題する文章で一線を退くことを宣言されました。当時は唐突感がぬぐえませんでした。しかし、40年を経た今になって、お膳立てができたこと、みて即次世代に引き継ぐ、6年で退いたその退き方の潔さにあらためて感じ入っています。今さら範とすることは叶いませんが、皆さんにもぜひ知っていただきたい、3頁にそのあいさつ文をご紹介します。ご一読ください。

目次

・巻頭言 「わたぼうし」500号を数える	1頁
・2025年認知症の日記念講演会のご案内	2頁
・「わたぼうし」50号(1987年3月号表紙)	3頁
・〈わが家の認知症ケア手帳〉(62)	
渡辺医院院長(当会顧問) 渡辺俊之	4頁
・トピックス 朝日新聞「ひと」欄	
・内田病院(沼田市) 田中志子院長の紹介	4頁
・編集後記	4頁

これからの予定

- 8月9日(土) 桐生つどい 10時～12時 桐生市総合福祉センター
- 8月10日(日) 渋川つどい 10時～12時 渋川市中央公民館
- 8月16日(土) 太田つどい 10時～12時 太田市蕪川行政センター
- 8月24日(日) 県央つどい 10時～12時 県社会福祉総合センター 7階 701会議室
- ◎ 9月21日 認知症の日記念講演会

電話相談

◎群馬県支部(群馬県からの委託事業)

認知症の人と家族のための電話相談

027(289)2740

◎本部フリーダイヤル

0120(294)456

X(旧 Twitter)

やっています



認知症の人と家族の会 群馬県支部主催

2025認知症の日（アルツハイマーデー）記念講演

認知症ケア専門士

3単位取得講座

認知症の人と家族を支える 支援とは

2025年 9 月 21日 (日曜)

13:00～16:15 (12:30開場)

群馬県社会福祉総合センター 8階ホール

参加費：一般 500円 (当日会場にてお支払いください)

：家族の会会員 無料

定員：100名

申し込み：Peatixサイト または FAX:027-289-2741 にてお申し込みください

<https://kazokugunma-nintisisyounohi2025.peatix.com>



「話したら楽になりました」「聞いてもらってよかった」

目の前の問題がすぐに解決しなくても、負担が軽くなったように感じる瞬間があります。反対に、解決への具体的な方法を示してもらったのに、心が萎んでゆくように感じることもあります。では「支援」とはなんなのか？『ナラティブ・ソーシャルワーク “〈支援〉しない支援”の方法』の著者荒井浩道先生とともに考えます。

第二部 記念講演

第一部 「家族の会」の役割 「つどい」と「家族の会」の紹介

介護家族の語らいの場である
「つどい」雰囲気や悲喜交々、
模擬形式でお見せします



『ナラティブ・アプローチの立場から考える 本当に必要な支援とは』

クライアントが抱える問題の主人公はクライアント自身です。支援者にできるのは、その言葉に耳を傾け、同じ場所、同じ時間、同じ物語を共有すること。このような考え方をナラティブ（物語）・アプローチと言います。福祉の現場には今、「支援しない支援」が必要なのではないかと思えます

講師：荒井浩道 / 駒澤大学教授

1973年群馬県生まれ
早稲田大学大学院修了 博士（人間科学）
駒澤大学文学部社会学科社会福祉学専攻教授
著書『ナラティブ・ソーシャルワーク “〈支援〉
しない支援”の方法』（新泉社）
共著『ソーシャルワーカーのミライー混沌の中
にそれでも希望の種を蒔く』（生活書院）ほか
多数



後援：厚生労働省 群馬県 日本認知症ケア学会

群馬県社会福祉士会 群馬県介護福祉士会 群馬県介護支援専門員協会

群馬県ホームヘルパー協議会 群馬県看護協会

協賛：群馬県地域密着型サービス連絡協議会

*群馬県社会福祉協議会社会福祉振興基金対象事業

「認知症の人と家族の会」群馬県支部 〒371-0843 群馬県前橋市新前橋町13-12 群馬県社会福祉総合センター7F

Tel : 027-289-2740

Mail : misato@xp.wind.jp

<http://www.ninchishokazoku-gunma.jp>



早寝・早起き老化も防ぐ

第 50 号

毎月 10 日発行

発行責任者 加藤道子

群馬県杳老人を支える会

電話 0273 (74) 3629

群馬郡榛名町中室田 2255

わたぼうしの発刊も 50 号を数えることになりました。6 年前、杳け老人を支える会を発足させ、老親をかかえ、相談する機関もなく、語り合う仲間も見当らぬ当時に、唯一の連絡方法として、へわたぼうしVを出そうとふみきりました。その時の仲間をご紹介したいと思います。

なんとかなりそうな状況、会費を出したいとの促しの方法も得て、2 年目から若干の購読料を頂きました。勿論、印刷代、郵送料、封筒代と、頂く費用ではまかなえません。この仕事の意義を強調し、続けるため援助をし続けてくれました加藤善徳のことにふれさせて頂きます。彼

います。

折しも、50 号と云う節目をむかえ、更に、新年度から、共同募金会のご援助も頂ける見込みでございますので、安心して後事を託し、この度、代表を交替させて頂きます。良き時、良き人を与えられ、私には身に余る恩寵の連続でございました。

よき時をえて わたぼうし 50 号に際して

代表 加藤道子



羽鳥守氏、清水秀夫氏（共に現愛老園職員）、松岳京子氏、竹田千恵子氏です。清水氏の丹精な手書きの 1、2 号は貴重な資料となりました。

は 4 年来のパーキンソン病を療養中で、本年 80 歳を迎えました。私の唯一の理解者でございました。今度は私が彼を支えようございませう。

将来を展望し、見とほしはな
いまま、3 号から印刷所に依頼して本 50 号まで続けて参りました。自費出版の 1 年を経過して

へわたぼうしV 継続に関して
は、みさと保養所の田部井が企画編集を担当して、既に 3 年余を経ておりますので萬全でござ

へわたぼうしV 発刊の 5 年有余、陰に陽にご指導、ご援助頂きました方々、紙上をもちまして深く感謝申しあげるばかりでございます。

かえりみますとき、群馬に参りまして 15 年、生涯かけての祈りを抱きつけました。そのあかしとして、現実の形となりましたものの一つがへわたぼうしVでございます。萬感、涙と共に胸をよぎって参ります。

新年度からページ数も増やし新しい感覚でスタートいたす筈でございます。何卒、倍旧のご厚情をもちまして、ご指導たまりますよう御願いを致します。本当にありがとうございます。感謝でございます。

渡辺俊之のへわが家の認知症ケア手帳⑥ いつまで一人暮らしできるか

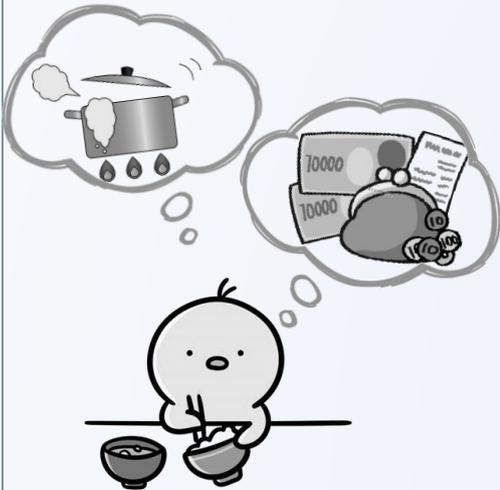
渡辺医院院長（精神科医、当会顧問） 渡辺俊之



「一人暮らしの母親に物忘れが出てきたんです」と息子の A さん（60 代）は心配していました。自分の近くに住んでもらおうと思っていたところ、「転倒して入院になりました」と病院から連絡が入りました。母親は左腕の骨折で済みましたが、画像診断で脳の萎縮が見つかり、結局、施設入所を決めました。厚生労働省の調査によると、2022 年の単身高齢者世帯は 873 万あり、認知症高齢者の一人暮らしも相当数いるとみられます。

1 人で暮らす認知症高齢者の代表的なリスクを挙げてみます。① 持病の悪化（高血圧や糖尿病などの悪化に自分で気づかない）② 転倒（視力や運動能力が低下し、段差に躓く、濡れた床や道で滑る）③ 火災（台所での火の消し忘れ、たばこの不始末）④ 迷子と徘徊（居場所が分からなくなる、夕方から夜に意識レベルが低下して外へ出て行く）⑤ 生活習慣と服薬管理の悪化（食事が不規則、低栄養、不潔、

排せつトラブル、薬の飲み忘れや飲み過ぎ）⑥ 金銭問題（金銭管理ができない、特殊詐欺被害）⑦ 交通事故（電車事故、運転トラブル）——などです。電車事故などは、家族への賠償問題になる場合もあるので注意が必要です。「父親は運転できるから一人で大丈夫」と言う家族に時々出会いますが、長期記憶を使う運転は認知症があっても可能なことがあるのです。家族には「否認」という防衛が働き、ついできる部分に焦点を当ててしまいがち。生活状況を把握し、「できない部分」もきちんと認め、不測の事態に備えましょう。



トピックス

朝日新聞「ひと」欄（2025 年 7 月 3 日付）

群馬県認知症疾患医療センター

内田病院院長 田中志子先生 掲載



ひと

2025・7・3

「治療もケアもきちんと提供できる病院を増やしたい」。2月に仲間と「ケアする病院ネットワーク」を立ち上げた急性期、慢性期、精神科など全国の9病院が参加する。

原点は30年前。実家の内田病院（群馬県沼田市）で内科医として働き始めた。認知症の入院患者がベッドや車いすに縛り付けられていた。その姿に驚愕した。毎朝、身体拘束を解いて歩いたが、「理

「ケアする病院ネットワーク」を設立した内田病院院長

田中志子 さん(59)

事長の娘が余計なことを」と看護師らは反発し再び縛った。患者から濡れた「ありがとこ」の声を支えに続けると、少しずつ理解するスタッフが増えた。2002年に病院全体で拘束はゼロになった。病棟の雰囲気が変わった。笑顔が増え、家族の面会も増えた。スタッフにもより良いケアへの意欲が生まれ、ソフト食の導入、排泄ケアの見直し、褥瘡対策などに次々と取り組んだ。

ロビーに「終わりよければすべてよし」の樹と名付けたシンボルがある。幸せな看取りをしているとの姿勢を示すもので、「ここで最期を迎えられて良かった」と思う遺族には患者のイニシャルと命日を記入した葉っぱを掲示してもらう。

日本では身体拘束は精神科などを中心に「必要悪」との考えが根強く残る。「治療とケアを調和させることで患者との信頼関係は深まり、医療従事者にもやりがいを感じられる環境が整う。入院生活が快適になる病院が増えることが目標です」

写真 大久保真紀

〈編集後記〉

猛暑です。でも、時折の雨で草木はどんどん伸びます。陽が照りだす前のささやかな草刈、剪定では到底追いつきません。お盆は目と鼻の先。かといって無理は禁物、ああ。（田部井）

